

2021年12月28日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 渡辺 紀子
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 訪問介護員を対象としたコミュニケーション能力の強化による心理社会的効果
論文題目（英文） Communication Skills Improvement and its Psychosocial Effects for Home Visiting Staff

公開審査会

実施年月日・時間 2021年12月13日・10:30-12:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	竹中 晃二	Ed. D. (Human Movement) 博士（心理学）	Boston University 九州大学	健康心理学
副査	早稲田大学・教授	加瀬 裕子	博士（人間科学）	早稲田大学	老年学
副査	早稲田大学・教授	扇原 淳	博士（医学）	順天堂大学	社会医学
副査	神奈川大学・准教授	山蔦 圭輔	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学

論文審査委員会は、渡辺紀子氏による博士学位論文「訪問介護員を対象としたコミュニケーション能力の強化による心理社会的効果」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：本来の目的は、訪問介護員の能力を強化することだと思うが、訪問介護員にとって、コミュニケーションだけが必要な能力ではなく、訪問介護員の仕事や社会的役割に基づいた能力が必要と思うが如何か。

回答：本論文の冒頭では、管理層職員を対象にして、超高齢社会における医療・福祉分野の変化が現場に与える影響について実態調査を行っている。その結果、多様化した職場では、特に訪問介護員のコミュニケーション能力の低さが示唆されたことから、本論文では訪問介護員のコミュニケーション能力強化に焦点を当てた。

1.2 質問：コミュニケーション・プログラムは著者が起案した独自のものなのか、一般的な内容とそれほど変わらないように思うが如何か。

回答：コミュニケーションスキル・プログラム(以下、CSP と略す)では、既存の教材と先行研究のエビデンスを引用して構成し、介護職員の基礎研修で用いられているコミュニケーションに関わる教材に加えた。その上で、開発したプログラムは、複数の関連施設における管理職者および講師の意見を丁寧に聴取したつもりである。

1.3 質問：コミュニケーション能力の不足だけが介護職全体の離職の原因ではないと思う。また、利用者へのコミュニケーションには、特に認知症患者とのやりとりが重要と考えるが如何か。

回答：介護職全体の離職理由がすべてコミュニケーション能力の不足ではないが、離職理由について調べた研究では人間関係に起因する理由が大きく影響している。対人援助職という面では、訪問介護員も同様と考え、本研究ではコミュニケーション能力の強化に焦点をあてた。

1.4 質問：研究3において声がけのほか、非音声的コミュニケーションの具体的な内容を示していないのはなぜか。

回答：第3章のテーマ分析の結果では、非言語コミュニケーションの重要性について言及している。ご指摘を受けて、本研究では、まず言語・非言語コミュニケーションのほか、心身の疾患により特別な対応が必要な利用者に対するコミュニケーションの重要性を認識し、さらに今後の課題として記述する。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 多々ある、介護訪問者に必要な能力からコミュニケーションに絞った理由を明確にするべきである。

2.1.2 p. 66 に記載されている「日本語教育を専門とする博士号保有者」の表現を正確な表現に修正すべきである。

2.1.3 マネージャーと現場職員が思う能力に乖離があるか否かを確認し、違いをうめることも重要と考えられるがその点を追記すべきである。

2.1.4 介入評価は、十数人なのでパラメトリック分析よりもノンパラメトリック分析を用いた方がよいのではないか。

2.1.5 研究4においてENDCOREが何を測定する尺度なのかの説明をいれるべきである。

2.1.6 研究5の横断的検討から、スキルが高い人、また低い人の特徴を示すべきである。

2.1.7 質問：研究の中で単回帰分析を繰り返しているが、共分散構造分析を用いてパスとしてみせるべきではないのか。

2.1.8 コミュニケーションスキルと職務満足度の関係において、多くの分析が重複しているため、ソーシャルサポートを媒介変数とする分析だけでよいのではないか。

2.1.9 離職意図を目的変数とした重回帰分析について、軋轢の内容を説明すべきである。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 本研究の目的部分では、介護訪問者にとって必要と考えられる能力を列挙し、コミュニケーション能力の強化がそれらの背景の一つと考えられると述べた。
- 2.2.2 「日本語教育学を専門とする博士号保有者」を「日本語教育学を専門とする博士号の学位を取得した者」に訂正した。
- 2.2.3 本論文の説明が曖昧であったため、第2章では筆者の意図が伝わるように表現を修正した。
- 2.2.4 Wilcoxonの符号付き順位検定を事前・事後で実施したが、Communication Skill Scale for Home Visiting Staff (以下CHVSと略す) 及び心理社会的変数において有意差が確認できなかった。その記述を行った。
- 2.2.5 藤本・大坊(2007)が開発したENDCOREsは、統合的なコミュニケーション能力を測定しており、内容の説明を追記した。
- 2.2.6 横断研究では、女性、高い年齢層、正規職員のそれぞれが男性、低年齢層、非正規職員と比べて有意に高い数値を示していることを述べた。
- 2.2.7 単回帰分析の結果については、CHVS、職務満足、ソーシャルサポートに絞って表にまとめた。本論文では、今後の課題として、探索的及び確証的因子分析による変数の因果関係を検討する旨を記載した。
- 2.2.8 単回帰分析は、ソーシャルサポートと職務満足のみを表で示し、後は媒介分析を中心に文章で示した。
- 2.2.9 第7章で方法と結果の小見出しに離職意図に関する内容を掲載したものの、実際には検討していないために当該部分を削除した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文では、訪問介護員へのコミュニケーション能力強化が良質な介護ケアを提供し、利用者との関係性を促進し、訪問看護者自身の精神的健康の保持とウェルビーイングの向上に繋がるという仮説を立てて研究を行っている。その上で、訪問介護員のコミュニケーション能力についての尺度の開発、および介入プログラムの開発・評価という一貫した研究内容を示しているために、本論文の目的の明確性と妥当性が担保されている。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文の冒頭において、介護現場の実態調査を基に課題と目的を明らかにし、評価尺度と介入方略の開発・評価を行い、研究計画を明確にしている。本論文で実施した手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（研究1：2015-000；2014-000）を受けて実施しており、倫理的な配慮がなされている。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文で開発したコミュニケーション能力尺度により、ソーシャルサポート、職務満足度及び職務エンゲージメントと正の関係が、またストレスと負の関係があることが明らかにされた。また、コミュニケーション能力による離職意図、他者との軋轢への関係についても定量的に証明しており、本論文の研究成果は明確で妥当なものと判断した。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
本論文では、訪問介護員が実際に行っている業務に即した内容として、対利用者だけでなく、対同僚・他職種へのコミュニケーション能力尺度を開発しており、訪問介護員本人だけでなく、施設の上長や研修会講師に繰り返し行っている点で独創的で新規性がある内容となっている。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本研究は、本格的な少子高齢社会に向けてますますニーズが高まる訪問介護サービスを担う訪問介護員の仕事の質の向上と職場定着に貢献する。

3.5.2 コミュニケーション能力を強化することにより、訪問介護員の個人資源（ソーシャルサポートや自己効力感など）を高め、職務満足度や職務エンゲージメントを向上させることに貢献する。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

本論文は、コミュニケーション能力を強化することによって訪問介護員の精神的健康を守ろうとしている。さらに、コミュニケーション能力の向上は、ソーシャルサポートを媒介として職務満足に影響を与え、職務エンゲージメントの向上とストレス低減に影響を与える。これらは、人間科学において核となる能力開発やストレスマネジメントに貢献する。

3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

渡辺紀子・松井智子・竹中晃二（2020）. 高齢者対象の自立支援型サービス (Reablement, Restorative Care, Active Service Model) に関する研究動向：スコーピング・レビュー 人間科学研究 33-1 補遺号, 13-25.

渡辺紀子・島崎崇史・竹中晃二（2021）. 訪問介護員を対象としたコミュニケーション能力尺度の開発 Journal of Health Psychology Research 1-12

<https://doi.org/10.11560/jhpr.201211145>.

渡辺紀子・竹中晃二（2022）. 訪問介護員の離職意図に及ぼすコミュニケーション能力と心理社会的要因 産業・組織心理学研究 36-1（現在印刷中）

渡辺紀子・竹中晃二（2022）. 訪問介護員のコミュニケーション行動から考える職場支援の検討 人間科学研究 35-1 補遺号（掲載予定）

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上